



の中の

子ども
たち

第9回 「少年と自転車」

—セカンドベスト—

川崎 二三彦

ある里子

2歳で乳児院から里親に引き取られ、そのまま高校を卒業した女性がいた。無事就職も決まり、何とか一人暮らしにも慣れてきた頃、担当児童福祉司だった私に彼女から電話が架かってきた。

「自分の苗字を里親の姓に変えたいんだけど、できる？」

彼女は幼い頃から里親の姓を名乗っていたのだが、いざ独り立ちしてみると、たとえば自動車の免許取得ひとつにしても、本名を記載するしかないのである。友人に免許証を見せたい彼女は、名前の秘密を知られることを恐れ、ずっと我慢していた。

「20歳になれば、独力で家庭裁判所へ姓の変更を申し立てることができるよ」

そう言って私は、里親の姓を名乗っていた期間が長期にわたることを証する書類を用意して彼女に渡した。

そんな彼女が、もう一つ頼んできたことがある。実の親を探してほしいというのだ。

「会ってどうしたい？」

何気なく尋ねた時の彼女の答えが忘れられない。

「決まってるやろ！ 張り倒してやるんや」

不都合な真実

この映画に出てくる11歳の少年も、父親を探そうとする点では彼女と同じだ。事情はわからないが、父は息子を施設に預けて身を隠しており、少年は、わずかな手がかりを頼りに無我夢中で父の姿を追い求めるのである。ただし、私が出会った彼女と違うのは、決して



「張り倒す」ためではないところだ。

「お父さんは引っ越したんだから、いくら電話してもつながらないよ。さあ、その受話器をよこしなさい」

電話の向こうから「おかけになった電話番号は、現在使われておりません。番号をお確かめになって…」というメッセージが流れるのを確認して、大人たちは少年の行為が無駄であることをわからせようとする。けれど彼は、決して受話器を手放さない。父が自分に内緒で姿を消すなんて、絶対あるはずがないと信じて……。いや、実のところ彼は信じてなんかいない。ただ、疑うという選択肢を持たないだけなのだ。なぜとって、疑えば生きてなんかいけないから。

私もその部類だが、大人は不都合な真実を子どもに伝えることを躊躇する。できれば機が熟すまで、つまりは彼や彼女が冷静にその事実を受けとめることができると（自分たちが）思えるまで、待ったほうがいいと考える。だが、子どもは違う。<今すぐ>なのだ。

周囲の大人は、だから真実が明るみに出ることを恐れ、子どもの必死さにせつなくなる。映画を観ている私も、いつの間に身を固くし、顔がこわばっ

ていく……。

自転車

さて物語は進行し、少年は、ひょんなことから週末里親を引き受けた女性とともに、父を探し続ける。そしてわかったことは、自分があるほど大切にしていた自転車（マウンテンバイク）を、当の父親が売り払ったということ。里親によって自転車が買い戻された途端、少年は大人達の制止を振り切って街へ飛び出していくのだが、その運転さばきの巧みなこと。パンフレットを読むと、映画製作はどうやら自転車の特訓から始まったらしい。確かに彼が自転車で駆け抜けるからこそ、映画はすごい緊迫感を醸し出すのである。大人の手をすりりとかわして走り抜け、あるいはせっかくの自転車を奪われて、今度は彼がどこまでも追いかける……。自転車は、つまりは暗喩だ。それは彼自身であり、また彼が最も大切にしているものの象徴なのだろう。



セカンドベスト

自転車が疾駆する度に胸苦しさを覚えながら、ふと思いだした映画があった。「セカンドベスト／父を探す旅」だ (<http://bit.ly/HWTMds>)。20年も前の作品だが、父は服役していて養育が出来ない。そこに現れた独身男性が養親になることを申し出て、10歳の少年の心が揺れ動くのである。

*

一方、本作での少年は、週末里親の女性にも支えられてついに父を見つけ、短い会話を交わし、そして拒絶される。その後は、さもありなんという

展開があり、再び父に対するいじらしい気持ちが表現され、再び拒否される。

とすると、こんな彼と付き合う里親女性も穏やかではられない。彼の行動に困惑し、自身の恋人との関係も脅かされて決断を迫られる。

こうした紆余曲折の後のラストに登場するのが、やはり自転車である。ただし、最後のシーンでは自転車は疾駆しない。その走りはあくまでも穏やかであり、周囲の風景に溶け込んでいるのであった。

*

二つの映画に出てくる少年は、いずれも名状しがたい余韻を残して^{たびだち}出発を迎え、幕となる。

「そうか、私たちの相談援助活動も、急所はセカンドベストにあるのかも…」

唐突にこんなことを書くと、読者の怪訝そうな顔が浮かぶけれど、考えてみれば、彼らは決して望んでいたものを手にしたわけではない。彼らの決心には悲しみが隠されており、現実を、つまりはセカンドベストを受け入れることで初めて^{たびだ}出発つことができたのである。

だったら、援助者も同じではないのか。相談者とともに変えられぬものを受け入れ、受けとめ、セカンドベストの中にこそベストがあることを自覚する、この映画を観て気づかされたのは、そのことだ。

* 2011 / ベルギー・フランス・イタリア
* 鑑賞データ 2012/04/01 109 シネマズ川崎
* 公式 HP <http://www.bitters.co.jp/jitensha/>
* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/16375>

<これまでの連載>

- | | |
|----------------|---|
| 第1回 「プレシャス」 | http://bit.ly/9qGWXm |
| 第2回 「クロッシング」 | http://bit.ly/rYwUnO |
| 第3回 「冬の小鳥」 | http://bit.ly/eGJ1d9 |
| 第4回 「その街のこども」 | http://bit.ly/hzhB9t |
| 第5回 「八日目の蟬」 | http://bit.ly/keXFwL |
| 第6回 「いのちの子ども」 | http://bit.ly/pm8V0p |
| 第7回 「ラビット・ホール」 | http://bit.ly/wF8G4a |
| 第8回 「サラの鍵」 | http://bit.ly/Hf2MsL |